荒猪との対決 2-2

田宮 治

最高の大一番

あれほど探し求め、追い続けた「化け物」の正体も、終わってみれば今までの大猪獲りと何も変わらない、思ったとおりの完勝である。まだ入山後三十分くらいで、それこそ「本物の荒猪との対決」を二人に見せることができたのだ。私はやっとほっとして水を取り出してガブ飲みした。

そして軽装で臨む戦いであっても最低限の準備、つまり腰には犬たちの引き綱三本にナタとナイフ、背袋にはパンと水くらいは必ず持つことである。頃合いを見計らい、「よし、よし、よくやった」と声をかけながらマロ号、ヨシ号シロ号の順に頭をなでパンを与え、全身を点検しながら大猪から引き離した。

残念ながら、激戦の中での撮影などはできる余裕もないのでカメラはない。三人もいるのだから、そのうちに良い写真も撮れるようになり、お見せできると思うのだが、その前に数多くの激戦の場を生で体験して、それに対する根性を培ってほしい。そしてたとえどんな猪であろうと、絶対に負けない執念を汲み取り、何とか覚えてもらいたい。ニコニコ笑いながら、あまりくどくならないように教えてやる。

「さあ、これを引き出し、うまいビールでも飲みますか」

冗談まじりの大声でこれからの手順を示し、ひとまず犬たちを車まで引き下ろした。そこで山彦会千葉県支部相談役の平野氏に応援を依頼、駆けつけてもらった。

入ったら最後、身動きできない竹藪の中からの引き出しとあって心配したが、さすが平野氏は手慣れたもので、手際よく運び出す道をまたたくまに作り上げ、自ら先頭に立ち一生懸命引き出してくれた。私はそのお陰で、残しておきたい写真を遅ればせながら撮ることができ、うれしさがまた一つ広がった。

「最高の大一番」であったが、終わってみればほんの「一瞬の出来事」のようで、四人でドーンと車に積み上げたのはまだ十時頃である。猪の獲れる時は何事もみなラッキーで、おしなべて良い方向にいく。あと一戦は十分に戦える余裕の凱旋である。朝方抜け跡を見ながら通った林道の景色までも新鮮で、何となくウキウキするようだ。支部（北嶋家）に着くと、奥様と子供たちが手を振って出迎えてくれた。大喜びである。

「ああ、よかった。こんなに喜んでくれている」

しみじみと今ある幸せに感謝して、心の中で手を合わせていた。良い気分で、最高の猪猟ができる陰の要を作り上げているのは奥様の言動である。いつも変わることなく実に献身的にグループの面倒を見てくれている。その上、子供たちにまで狩猟の心を教えているようで、出て行く時や帰って来る時はみんなで飛び出て来て、真っ先に軽トラの荷台を見るのである。

「今日は獲れなくてごめんね。明日は必ず獲って来るからね」と同じ繰り返しになっていたが、今日こそは本当に大猪を積んでのお帰りである。

「猪だ!! でかいなァ!」

子供たちは大喜びである。その喜びを早速写真にして残すべく北嶋氏がこの時のために作ってくれた「関東猪犬猟山彦会」の看板を自ら持ち出して来て記念撮影となったが、今度の猪だけは特別で、何度もやってきた大猪獲りとは一味も二味も異なるように思っていた。

まず、その一つは支部会員に自信を持ってもらったことである。本当に大猪にぶち当たり、激闘を物にしなければ何を言っても始まらなかったことである。その第一の目標を見事に達成したことは、このことによってわき上がった「みんなの自信」と、地元農民も含めた山彦会に対する期待である。

その証のように、木更津猟友会会長の佐久間さんまで見に来られ、「こんな大猪は見たことがない」とびっくりされている。北嶋氏の説明で、三頭の犬たちで止め、撃ち獲った様子を知ると、「それはすごい。この辺の山は猪止め犬でも並のものでは止まらないので、それを知っている地元猟人はわざわざ遠方の止めやすい猟場に出猟している。本当にたいしたものだ」と感心し、「これからも頑張って」と励ましてくれた。

さて、これからが獲れて大変な猪の解体作業であるが、私はどちらかというと苦手である。誰もできなければやるにはやるが、パスしたいのが本音である。

それというのも、若い頃は何が獲れてもすべて父や兄たちがやってくれていたし、最近ではどのグループに出向いても客人扱いされていて、引き出しも解体作業も免除され、酒好きなこともあってグループの三役たちと早めに飲み始めている。その代わりといっては何だが、山では狩りに専念し、猪獲りには執念を持って臨んできた。

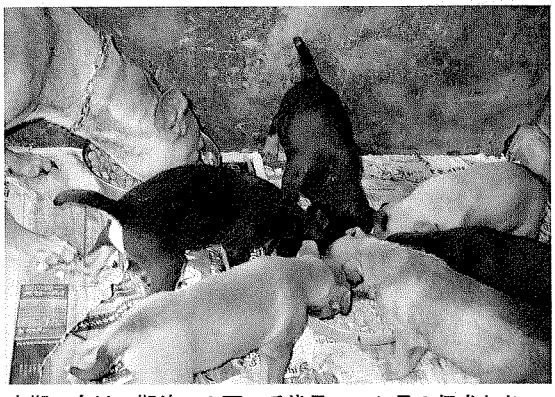
考えてみると、その点では悪い私のようだが、その悪い私に代わって、平野氏が見事な猪の解体作業を若者たちに見せ、その手順を親切に教えている。

平野氏は得意な罠猟で毎年何十頭も猪を獲る名人芸を持ちながら、「どうしても銃猟が好きだ」とこだわって参加している。猪猟は今までも地元のメンバーでやってきたので、その気持ちは大変なものである。私と同じ年で何となく同じ時代を生きた者同士で、考え方まで似ているようである。何事をするにも先頭に立ち、嫌な顔一つしないで黙々とやられるが、人

技で止めた荒猪（147 kg）。ヨシ号、シロ号、マロ号の3頭で寝屋止め、5メートルの距離から撃ち獲る。激戦だったが、「無傷」「完勝」は何よりである

地獄の引き出しも、若い力でなんのその。
みな元気でルンルン気分。一生懸命である

農道の堰に猪を追い込むヨシ号、シロ号、マロ号の3頭。道が近く撃てない時は、迷わず刺すこと。単独猟では当然覚えねばならない大切なことで、犬たちを守る重要なことである



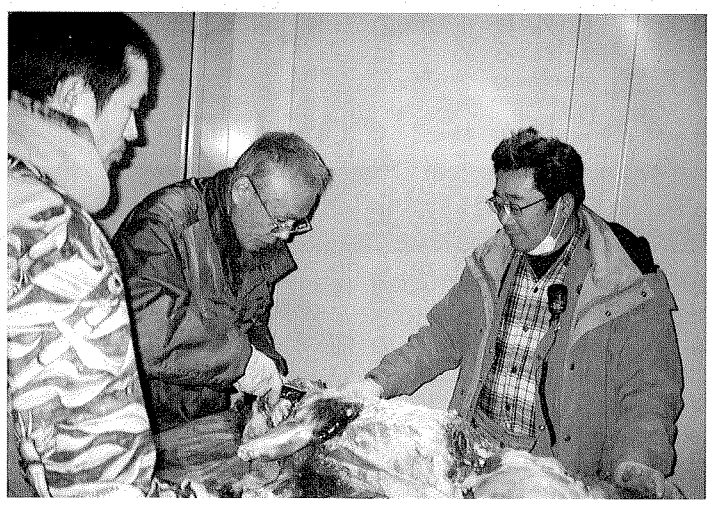
来期に向けて期待の6頭、千代号×ヨシ号の仔犬たち（すべて牡）。バリバリの止め犬を目指す

ヨシ号、シロ号、マロ号は大猪でも必ず止める

物も解体作業も実に素晴らしい。そんなわけで「相談役」をお願いして、若者たちの指導に当たってもらっている。

「田宮さん、休んでいてくださいよ。ここに座って……」と、いつも気遣かってくれている。正直なところ、めいっぱい山でやってくると、じっと立っているのはしんどい。ついつい甘えているが、その分まで山で頑張るから、何とか勘弁していただきたいと思っている。

そんな平野氏まで、「千葉では見たことがない大猪だ」と繰り返し言っている。一四七キロともなれば、関東の山でもそうざらには獲れないし、止め撃ちの教材にするのは大き過ぎた気もするが、そんな大物にもびくともしない三頭の仕上がり具合に満足し、どうしても見せたい大猪との対決を見事に完勝して、思った以上の攻め方と撃ち方がきちっとできたことでほっとしていた。



左から加藤君、平野氏、棟方さん。平野氏はいつも、親切に解体作業を教えている

目標の大命題をクリア

何しろ、この荒猪獲りは前述のように、初猟から掲げた目標であり大命題である。そして、私が猪猟を教えていく上で真っ先にやって見せないことには始まらない、重大かつ大切な事柄だったのである。

猪止め犬猟では絶対に避けて通れないこの難関を、こんなに見事に乗り越え、激戦の神髄までありのまま見ていただいたことは、この先、猪猟を実践していく上で何にも勝る実績となって若者たちの自信と勇気に繋がるはずである。私の後を必死で追い、まるごと信じ、覚えようと一生懸命だった二人に心から感謝、うれしさでいっぱいだった。

そんな特別な気分の中で、今日は四人が力を合わせ解体作業をやったので、つい先ほどまで荒れ狂っていた大猪もあっという間に美しい食肉となった。

「良い肉だね。この猪は意外に若いよ」と平野氏が言う。まだ日があるうちにお祝いが始まった。この時のために用意した炭で本物の焼き肉の味を出したいと、北嶋氏の気遣いもなかなかなものだ。平野氏もそんな北嶋氏の気持ちを大切にしているようで、「焼き肉」は炭火で塩とコショウで味つけするのが一番だと決める。あとは筋書きのないワイワイ、ガヤガヤである。猟をやっててよかったと思う最高のひとときである。

「おお、これはうまい」

「あんな大猪なのにやわらかいね」

「これが本当の肉の味だ」

みなご満悦のようだ。そこに少し甘味の奥様自慢の猪鍋と手料理が運ばれてくる。奥様はなかなかの料理上手で、猪の獲れない日で

ドッグフード1袋が全猟を支えます
アダルトミニチャンク
20kg5500円 7.5kg3400円
ドッグフードのご注文は全猟へ！

も手料理をいっぱい出して一生懸命もてなしてくれている。山彦会にとって奥様のこんな気持ちが何よりで、とても良いムードの中で猪猟ができるのだ。

盛り上がっている頃合いを見計らうかのように平野氏の体験話が飛び出した。

「手負いになった猪ほど怖いものはない。あくまでも罠での話だが、友人三人が罠にかかった猪に止めを入れようと近寄った。よく見ると、かかっている足が今にも外れそうになっているので、注意して処理しようとしたが、案の定、あっという間に外れてしまった。罠から外れれば猪は一目散に山に逃げ帰ると思うのが常識であるが、何と猪は三人目がけて飛びかかり、次々にケガを負わせた。その中の一人は一カ月も入院する大事になった。手負い猪は、逃げる前にきちっと仕返しをやってから山に帰ったのだ」

何とも恐ろしい話であるが、銃猟でも全く同じで、追い詰められた猪は必ず突いて来る。まずもって「猪は恐ろしいものと心してかかれ」という、平野氏らしいアドバイスである。

そのとおりである。猪との対決は人だって犬たちだって、命を賭けた大勝負なのである。私はニヤニヤ笑いながらビールを飲んでいたが、今、この若者たちに必要なことをよくぞ話してくれた。しかも罠猟師ならではの、実に的を射た教え方だと感じた。

猪猟はいついかなる時でも、安全でケガなどのないことが一番である。喜びが、笑いが毎度爆発できるのは当然のこと、万全の注意あってのことであり、そのために犬芸を究め猟技術を磨くのである。私のできる最高の猪猟を一生懸命やるから、残らず見て覚えてほしい。特に今日の激戦での犬たちの鳴き声と、大猪に対する寄り方、そして撃ち方、これだけは決して忘れるでないぞ!!と改めてつけ加えた。あとはまたニヤニヤしながらビールをあおる。俺はこのビールの味を絶対に忘れないぞ……。

北嶋氏は私が泊まれるように大型のキャンピングカーまで用意し、「気楽にいつでも来て泊まってください」と、心からもてなしてくれている。いつものように今日も泊まらせてもらい、また明日の一戦を二人で飲みながら話し合う。

「さあ、明日はお前が撃ってみろ!! もう猪撃ちの難題は、二つは教えた。あのとおりにやれば、たとえどんな猪が出ようが恐れることはない」と元気づける。

そういえば四〇キロくらいの猪は、私の見ている前で見事刺しているので、北嶋氏は自信ありげに「よし、明日は俺が撃つ……」とニコニコしている。子供たちにも「明日はお父さんが猪を撃つぞ」と言っている。子供たちの歓声が上がる。この気分が盛り上がり、心に熱く残っているうちに一気にやり遂げるのが一番良い。若いのだから私の前に出て思ったとおりにやって見ろ!! そばで必ず見守っているから……。

（この項終わり）

ご愛犬の首輪にネームプレートを付けましょう

「迷い犬を見つけてあずかっています」という電話をよくいただきます。しかし、首輪にネームプレートが付いていないために、せっかくご連絡をいただいても所有者を捜す手だてがありません。

また、ネームプレートを付けていなかったために失踪犬となり、野犬化して地域住民の迷惑となったりすることがあります。

「いらなくなった犬を放置した」という、ハンターのモラルを問うような報道も一部で見られます。このような誤解を受けないためにも、大切な伴侶であるあなたのご愛犬には、**住所・氏名・電話番号**の入ったネームプレートを必ず付けましょう。会員皆様のご協力をお願いします。